Title	入江節次郎著 帝国主義論への道
Sub Title	S. Irie, Way to the theory of imperialism
Author	飯田, 裕康
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.4 (1975. 4) ,p.402(100)- 404(102)
JaLC DOI	10.14991/001.19750401-0100
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19750401-0100

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

入江節次郎著

『帝国主義論への道』

経済学をはじめとして社会科学においては、対象が
いかに変化しようと不変な方法論や分析方法がある
という訳ではない。事態はきわめて深刻にも、対象と
方法とは常に一体化され、対象の展開（その発展）は、
既存の方法を無効にするか、その効力をそいでしまう。
こうしたことは、マルクス主義の場合にも当然妥当す
るのであって、マルクス主義的社会認識の重要な一環
をなす経済学もまた然りなのである。対象と方法との
このような社会科学的関連を経済学の領域において明
確に示すのが、帝国主義の問題であるといつてよいで
あろう。帝国主義論は、ただ理論経済学の分野のみな
らず、現代資本主義論とも密接なかかわり合いを持つ。
そこでは、単なる学説体系であることを超えて、現代
の超克への戦略的対応との結び付きも無視できない。
帝国主義の問題がまさにこのような意味で現代の問題
であること、それが、この問題への接近をより多様な
らしめ、対象と方法との連関をより複雑ならしめるこ
ともなる。本書がこうした問題への積極的な接近の
第一歩として世に問われたことに、まず敬意を表した
い。また、本書の著者がすでに発表した著書・論文等
からなる諸労作を通じて、既存の諸理論や立場にとら
われることなく、自由な思索をめぐらして得た成果
を、本書がさらに押し進めるものとなっていること
を、まず明らかにしておかなければならない。しか
し、それは、ただ当該問題にかんしての恣意的な対応
であるのではなく、著者や、その共同研究者が、いく
つかの機会にあきらかにしてきたような、従来の諸成
果の緻密な検討と、その批判的摂取とによって裏づけ
られているものであることもあきらかである。こうした
意味で、本書はまた帝国主義論への「学問的」接近
の代表例ともなりうるものである。

著者はすでに前著『帝国主義論序説』（ミネルヴァ書
房）や、著者を論者の一人としたユニークな講座『帝
国主義論研究』（御茶の水書房、第Ⅰ巻のみ）で、その独
自な見解を披歴されてきた。それらに共通しているの
は、著者が従来の帝国主義論研究を方法論的な問題視
点から批判的に分析してきたということである。とく

に『序説』においては、著者のいう直結論的帝国主義
論、すなわち『資本論』体系と「帝国主義論」体系と
を、『資本論』の上向として、あるいは、マルクスの
経済学批判体系プランの、いわゆる「後半部分」の実
現過程として結びつけようとする立場、への批判を積
極的に展開されて、帝国主義の理論的認識が、段階認
識を基軸としている以上、上向の論理は、それを充分
に把え切れないものであること、したがって帝国主義
の理論的性格は、段階規定を論理的に指定しうるもの
でなければならないとしてきた。そして、『資本論』
と「帝国主義論」とは、論理的には重層的関連という
独自の論理構造をもつものだとされてきている。本書
も、むしろこの著者の視点は保持されているのだが、
著者がそこから一步踏み出して、ではいったい何故に
この重層的関連を説くかという、著者の帝国主義論展
開の独自の方向性が、よりいっそう明解に提示されて
いる。ここに本書における「入江帝国主義論体系」
とも言うべきものへの具体的構築の積極的意義をみた
い。

他方で、本書は、著者の従来の研究の成果の積み上
げにもかかわらず、依然として読者をして十分には納
得させ難い点を残している。とくに、段階認識の基軸
的範疇たる金融資本の規定を、『序説』では、帝国主
義の社会体制把握の方法的範疇とされていた——その
点はむしろ本書でも再度確認されているが——のだが、
本書では、それを単なる方法的範疇であることから、
より具体的な帝国主義認識の深化に向けて展開するこ
とは留保され、評者のことばをもってすれば、現実資
本と貨幣資本との、独占段階における関連性の問題と
してのみ検討していることに端的に表明されているよ
うに思われる。さらに、第Ⅳ章で示される段階認識か
らする帝国主義分析の具体的方向として提示される帝
国主義形成の歴史的分析の主要な課題とされる19世紀
末のいわゆる「大不況」の方法論的位置づけの不明確
さも指摘しなければならないように思う。このよう
な著者自身の帝国主義把握の基本線にかかわる問題点
を念頭に、以下本書の構成と内容を評者なりにその要
点にそって紹介しておきたい。

本書はつぎのような構成をとる。

I 帝国主義論の対象と方法。II レーニン『帝国主
義』の根本問題。III レーニン『帝国主義』の解説。IV
帝国主義論の発展のために。このうち、全体としてI
の部分が分量的にも最も大きく、著者の主要な関心の
所在を知ることができる。II、IIIは、レーニン『帝国

主義」の方法をまずⅡで、ついで、その第一章から第三章までの内容解説をⅢでおこない、Ⅳはレーニンの批判的検討の成果に立って帝国主義論展開の方法論的視点の提示——といっても、評者はそれを予備的と理解したいが——をなしている。

本書の中心的な内容を構成し、著者自身の従来の見地の自己批判をも提起せざるをえなくした(はしがき)「Ⅰ帝国主義論の方法と対象」は、すでに触れたところでもあるが、著者の前著との重複を含みつつも、従来の帝国主義論研究の方法を「直結論」と「段階論」とに区分し、論理・歴史説に立つ論理主義や、逆に「歴史主義」的な並列論に代表される前者の立場への批判を展開し、その点では、後者に対して一定の評価を与えつつ帝国主義論の理論的性格を重層的関連として特長づけようとする。ここでは、自由主義段階の資本主義の原理的抽象としての『資本論』と帝国主義論との論理段階の相違ではなく、論理次元の相違(21頁)が強調される。また段階論としての帝国主義論を「類型論」と「世界資本主義論」とに区分し、これらを、基本的には、従来のいわゆる「正統的」な論理と歴史とへの「新しい関連のさせかたを示したもの」(29頁)として評価しつつも、世界資本主義論の方法である内面模写説に立つと、帝国主義論自体が解消してしまうとされる(35頁)。そこで「帝国主義論の方法をめぐる根本問題は、経済学における『論理と歴史』との関連をどのように捉えるか、という問題に究極的にはかかわってくるということができよう」(35頁)とし、それを重層的関連とするのである。いわゆる宇野ジュエによる帝国主義の典型的な把握が上記論点を明瞭に示すのであるが、ただ類型(タイプ)分析としてでなく、『資本論』の論理に匹敵するものとしてはじめて重層論理構造を形成しようとするところに、著者の理解の要点がある。こうした立場が、就中、帝国主義論の対象そのものの確定に向かうのは必定であろう。

そのさい著者にとっては、『資本論』の対象と帝国主義論の対象の相違は、それぞれの論理展開の段階的相違ではなく、論理次元の相違ということになる。この論理次元の相違の確認にさいして重要な意味をもつとされるのが、帝国主義論形成史である。さらにいまひとつ、著者がこの相違を確認しようとする点は、『資本論』の対象をも段階論的に把え直すこと、すなわち産業資本の段階的特質をあきらかにして、『資本論』自体の制約性をあきらかにしようとする点である。

こうした諸点の点検を通じて、著者は1870年代を1つの劃期とした帝国主義論の独自の成立の可能性に一步一步近づいてゆかれる。そこから主張されるのは、帝国主義論の対象としての資本主義が世界性をそなえており、帝国主義論は、従って、「資本主義の世界体制の構造論のようなものが前提として必要になってくるのではなからうか」(66頁)とされる。そこで、対象すなわち資本主義自体のもつ、段階的發展と帝国主義との関連として、対象領域の確定への方向が具体化される。

著者によれば、帝国主義の成立に至る資本主義世界体制の發展諸段階は、それぞれの資本主義の劃段階的基軸産業部門に応じて、綿工業段階、鉄工業段階、重工業段階として三段階に区分される。そのうち第三段階、重工業資本主義が、ロンドン金融市場を中心に、先進的資本主義と後発的資本主義との二形態に世界市場的に対抗するなかで、資本輸出を再生産・循環の不可欠の脈管となる段階としている(94頁)。この段階規定に立脚して帝国主義の資本主義は、産業資本段階の資本主義から完全に異なった現われ方をするものではないとして、対象自体が「重層関連」「重層構成」にあるとする。ここで著者が、ロンドン金融市場の存在を、帝国主義的資本主義に不可欠の前提として重視している点、注意しておいてよいであろう。しかし、何故ロンドン金融市場が「関連」の基軸となるのか、不明のままである。かくして、帝国主義論自体も、対象に規定されて『資本論』にたいして重層的関連にあるものとして規定される。この関連をふまえて歴史的現実への接近はより容易となるとされる。(126頁)。

Ⅱ、Ⅲはレーニン『帝国主義』の古典としての意義を、その方法、基軸範疇の展開に即して検討するノート(著者自身のはしがきのことば)である。Ⅱにおいては『帝国主義』のとり帝国主義成立の必然性の論理と、カテゴリー的展開の論理とが有機的に(論理的に)結びつかず、もっぱら前者が規定的に作用すると。しかも、そこでは成立と、没落とが同一の論理展開によって規定され、これが、帝国主義の段階的認識のための諸範疇の論理展開を弱めているとする。これを「横に並立する論理」(145頁)と表現している。いわゆる「五つの基本標識」もこのような論理展開に制約されるとされる。

Ⅳは本書の結論部分を構成するものであるが、ここで著者は、帝国主義論が帝国主義の必然の論理を組み込まねばならないことを確認して、そのための歴史分

析を、具体的にはいわゆる大不況期の分析をなさねばならないとされ、それは、『資本論』第1部の本源的蓄積過程に相当する地位にあるとする。これは、著者の帝国主義論展開のための具体的提言とうけとりたい。また、生産面の分析と貨幣・金融(信用)面の分析の必要性と両者の関連性如何といったことも重要だとされる。しかし、あくまで「生産資本の内部の過程にかかわる範疇の分析から始めていくのが妥当」(242頁)だとして、この「関連」に方法的枠づけをされる。また、当然予想される金融資本の類型的分析にたいしても、それが、「ロンドン=世界金融市場を頂点として編成される資本主義の世界体制への分業的組みこまれかたの形態を示すものとして捉えるとき、はじめてその把握が生きてくるのではなからうか」(250頁)として明確な処理をされている。

さて、本書のうち、Iは分量的にも最も多く、IVは最も少ない。そして従来の著者の筆法からすれば、Iは著者の帝国主義論への方法的視座を構成する部分であろう。だが、本書のもつ意義は、むしろIVに、そして一部はIIにおけるレーニン批判にあるとあってよい。IVにおいて、入江氏は、「大不況」の本格的分析を提唱されたが、そこには明確な理論的視点が用意されている。それに資本輸出を支え、それを基軸とした世界資本主義の再生産構造の要となったロンドン金融市場、いわば国際金融の構成要因となった資本蓄積機構の解明ということになるであろう。これを、現実資本と貨幣資本との蓄積過程での対抗的かつ協調的関係の分析としてつかむことを、いささか明確さを欠くとはいえ主張されていることは注目されてよい。入江氏が「生産資本」というときはまさにこの現実資本と考えてよいだろうし、それは、貨幣資本とのみ対立する。後者は帝国主義段階にあっては、いっそう信用制度と一体化しているはずである。さきに指摘した本書における著者の金融資本にたいする接近の視座の変化も、このような問題から発するものとすれば、むしろ積極的に評価したい。ただ、すでにこうした視点は、古典の一つたるヒルファディング『金融資本論』が示唆し、展開したところであった。本書での著者の視界がレーニンを中心としていることは、その点からして残念である。

大不況の歴史分析という課題はたしかに重要であるに違いない。しかし、こと帝国主義論はこれを明確な理論的視座から為さねばならない。単なる歴史分析に

わい小化されてはならないであろう。そのためには、「生産資本の分析」を始点とするといった抽象的規定で満足することはできない。また、本源的蓄積と大不況とをアナロジカルに並べることも誤解を生み易い。大不況は帝国主義の展開にたいしていかなる前提を作出することになったのかが、明確に打ち出される必要がある。この対照はさらに、階級構成の変化を問題として含むはずである。ここには、ヒルファディングをして「産業資本家の機能変化」と言わしめたような事態、資本家間の階層区分という新たな問題も包含されるであろう。この点は、とくに後発的資本主義国の場合、より明瞭に現象する事態だったのではなからうか。階級関係の変化と金融構造の変化との同時進行と相互関連、これが、帝国主義論の論理次元の独自性にかかわってくるというよいであろう。〔ミネルヴァ書房、1973年、B5判、263頁〕

飯田 裕 康
(経済学部教授)